

光に導かれて

2021年12月17日

大学一般教育部 松本 周

聖書: マタイによる福音書 2章1節~12節

<sup>1</sup> イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、<sup>2</sup> 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」<sup>3</sup> これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。<sup>4</sup> 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。<sup>5</sup> 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

<sup>6</sup> 『ユダの地、ベツレヘムよ、  
お前はユダの指導者たちの中で  
決していちばん小さいものではない。  
お前から指導者が現れ、  
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

<sup>7</sup> そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。<sup>8</sup> そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。<sup>9</sup> 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。<sup>10</sup> 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。<sup>11</sup> 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。<sup>12</sup>ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

クリスマス、イエス・キリストがお生まれになったとき、学者たちが幼子を礼拝しに訪れました。聖書は記します。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」この礼拝堂一番左のスタンドグラスに描かれている情景です。星の光に導かれて旅をし、ついに幼子イエスさまを救い主なる王として礼拝した学者たち。私たちもまた学者たちと共に、救い主の前にぬかずきます。

占星術の学者たちとは、現代のテレビや雑誌の星占いであるよりは、天文学者のような務めでした。暦を決めるうえで天体観測が欠かせません。古代文明が発展した地域はいずれも、精度の高い天体観測が発展していました。学者たちが星の動きを観測して畑の種まきや、収穫の時期を伝えました。占星術の学者は人々の生活に

必要不可欠な最高レベルの知識人として尊敬されていました。

東方から来た学者たち、聖書原文では「東」という語が複数形で記されています。つまり彼らは同じ場所にいたのではありませんでした。別々の地で星を観測していた彼らが、それぞれで不思議に輝く星を見つけました。そして、それが新しい王の誕生を告げる星だと知り、その王に会うためにそれぞれの地から、旅に出たのです。その旅の途上で彼らは出会い、同じ目的に向かい、一緒に歩き始めることとなりました。

星の光に導かれて、学者たちは、救い主のもとへ辿り着きました。彼らは生まれたばかりの幼子、その姿だけを見れば特に代わり映えのない赤子の前にひれ伏して礼拝しました。この幼子こそ神が人となった神の子、人間と共におられるために来て下さった救い主として礼拝しました。続いて学者たちは、贈り物つまりクリスマスプレゼントをイエスさまに献げました。これが世界ではじめのクリスマスプレゼントの出来事。そしてこのプレゼントにイエスさまがどのような方であるかが示されています。

学者たちの三つの贈り物はどれも高価なものばかり、全財産をはたかなければ手に入れないようなものばかりです。皆さんは今までの人生の中で、どの位高価なプレゼントを贈ったことがありますか。あるいはどんな時に、高価な贈り物をするでしょうか。

私自身、人生でたった一度だけ、高価なプレゼントを贈るという大それたことをしました。婚約指輪というプレゼントでした。結局、そのプレゼントのために、会社勤めでこつこつと蓄えた貯金と直前のボーナスを殆ど全部使い果たしてしまいました。でも、少し赤面しながら言いますが、それで惜しいとは思いませんでした。高価なプレゼントを贈るというのは、それを上回る大きな喜びに支えられているものです。

学者たちも、これらの贈り物を用意するのに財産の殆どを使い果たしたことでしょう。でも彼らは喜んでプレゼントをしました。そうしても無駄でない、それ以上の喜びがそこにはあったから。

最初の贈り物は黄金でした。古来、黄金は王が持つべきものとされていました。このプレゼントによって、イエス・キリストが私の人生を治め、守り、導いて下さる王であるという信仰が表明されています。私たち人間はたいいてい、自分の人生の王は自分だと思っています。自分の力で自分の人生を決め、切り開こうと考えます。けれどもここで、イエスさまに黄金を捧げる。そこには私の人生の王としてイエス・キリストを迎えるという姿勢が現れ出ています。その時に私の人生を導く方、真の王との出会いによって、私の人生の本当の意味・目的が見出されてきます。

二つ目のプレゼントは乳香です。これは石鹼のような形をして、この香を火で焚くと大変良い香りがします。聖書では祭司が使うものとされていました。神殿で働く祭司の役目は人々と神を仲介することでした。したがって乳香を捧げるのは、イエス・キリストが私たちと神を仲介して下さる方であることを示します。キリスト教においては、祈りを「イエス・キリストの御名によって」と締め括ります。そこにイエスさまが私たちの祈りと願いを父なる神に取り次ぐ祭司であるとの信仰が表れています。

そして、最後の贈り物は没薬でした。生まれたばかりの赤ん坊にプレゼントするにはあまりにもふさわしくない贈り物です。なぜなら没薬とは人が亡くなったとき、その体に塗って腐敗を防ぐための薬品で、誕生の時にはなんら関係ないものだからです。私たちがもし、赤ちゃんの誕生祝いに、お線香を持って行ったら、大変怒られることでしょう。このプレゼントを表面的に捉えるなら、とんでもない非常識な贈り物ということになります。けれどもこの非常識で、あまりに場違いに思える贈り物の中に、実は聖書の語るクリスマスの深い意味が込められています。それは誕生のこのときから、イエスさまの死を予告しているからです。イエス・キリストは私たち一人一人の罪の身代わりとして、罪を赦すために十字架にかかり死んでくださいました。その救いの業のために神が人としてこの世界に生まれて下さった。このことを没薬の贈り物は伝えています。

そして学者たちのプレゼントの意味をふまえるとき、実は彼らの贈り物に先立つプレゼントに気付かされます。イエス・キリストこそ、神から私たちへのクリスマスプレゼントであるということです。私たちが罪から救ってくださる救い主が与えられたということこそ、最高の、そして最初のクリスマスプレゼントでした。父なる神は、最愛の独り子を惜しまずに、私たちの救いのために贈ってくださいました。

今日の聖書箇所最後の言葉に目を留めて終わります。学者たちは「別の道を通って、自分たちの国へ帰って行った」(12節)。「別の道」、イエス・キリストと出会い、礼拝をささげる人はそれ以前と違った、新しい別の人生の道へ導かれていきます。イエス・キリストと出会うとき、人生に大きな転換が生じる。クリスマスの物語はその出来事を伝えます。東方の別々の地にいた学者たちが、救い主を求めることにおいて一つにされ、新しい人生の道へと導かれていった。そこには礼拝において、繰り返し生じる不思議な出来事のひな形が現れ出ています。元来、別々の場所に離れて存在していた者たちが、神の導きを見上げ歩みだすことにおいて一つとされていく、それが礼拝共同体です。救い主を礼拝するという一事で結び付けられ、一つとされる群れの歩みがそこに起こります。

キリストと出会い、キリストによって示される新しい道は時に、私の考えや思いをはるかに超えています。しかしクリスマス、キリスト礼拝から始まる新しい道、その歩みにはイエス・キリストご自身が導きの光となって伴ってくださいます。イエス・キリストと出会うまでを導いたのは星の光、そしてイエス・キリストと出会ってから新しい人生の旅路を導く光は、主キリストご自身である。それが今日の招きの言葉で聞いたイザヤ書の御言「主があなたのとこしえの光となり、あなたの神があなたの輝きとなられる。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆きの日々は終わる。」キリストの光が私たちに照らしています。

私たちの人生の新たな別の道は、学者たちと同様、礼拝から始まります。それぞれ別々であった者たちが、キリスト教学校である宮城学院へ、クリスマスの礼拝へ集められました。そしてこの礼拝から、キリストが導きの光である新たな道が拓かれています。